

(城西人文研究第 28 卷)

# イエイツ 「ハールーン・アル＝ラシードの贈り物」 について (I)

小 堀 隆 司

## (1)

長編詩としては詩集『塔』*The Tower* のなかで最も長い物語詩「ハールーン・アル＝ラシードの贈り物」*'The Gift of Harun Al-Rashid'* は、その背景となっている場所といい時代といい、これまでの作品とは打って変わってひと際異彩を放っている。内なる精神の流浪という衣裳のもとに様々な遍歴を重ねて「私」の辿り着いた場所とは、聖なる都ビザンチンでもアイルランドでもなく、はたまた古代ギリシアでもない。『塔』のなかの「私」は巡りめぐってついにイスラムの世界に辿り着き、そこからまたさらに新たな流浪をつづける。その流浪する時代は現在から遠く離れてバグダッドに栄えたアッバース朝(750～1258 年)全盛期のある一時代に照準が充てられている。作品は、二人の対話、つまり八世紀初頭のイスラムの世界を支配下に置いていた五代目カリフ(教主)ハールーン・アル＝ラシード(在 786～809)とその家臣であるキリスト教徒にして詩人、哲学者のクスタ・ベン・ルカとが交わす対話を中軸にして構成されているが、詩全体の構成はやや複雑なものとなっている。この作品の中軸となる彼らの対話に加えて、語り手である「私」クスタ・ベン・ルカにまつわる物語もまた作品の中軸を担っており、しかも両者が深く連関しているところにその複雑さが窺える。複雑な構成はそれだけではない。クスタ・ベン・

ルカの個人史としての物語を決定づける出来事を自ら綴った手紙も詩の構造をさらに複雑にしている。「私」の秘かに書いた手紙を昔馴染みの友人に渡すようにと、伝令者らしき者に託す場面がいきなり詩の冒頭で描かれているが、ある解き難い問題を解明したことを伝える文言の綴られたその手紙は、唯一の理解者であろう友人こそ読むに適しいと「私」が考えるほど理解し難い箇所が少なからずある。また、当面は封印しておくべきだと「私」の判断したその手紙はこの作品のなかでは果して封印されているのか否かという点も詩を複雑にしている。手紙を託したい旨を伝えるメッセージから始まり、友人に宛てた手紙のこと、カリフと「私」の対話、そして自身の生の来歴とあるべき生への確信を歌いあげて終わる「ハールーン・アル＝ラシードの贈り物」にあって、仮にそこに手紙の内容が明かされているとすれば、ではその文言はどこから始まってどこで終わるのか、どうにも特定し難い。この点もまた作品をより複雑な構造に仕立てあげている要因のひとつとして指摘されよう。

クスタ・ベン・ルカの個人史を歌うこの長編物語詩は、その筋道を通時的に辿るのに際してはそれほど複雑でもなく、むしろ単純な流れにのって辿ることができるが、しかし彼の遭遇した出来事の一つひとつに眼をやったとき、事態は全くその逆となり疑問な点を残したまま物語が進む。従ってそれぞれの出来事は必ずしもその意味内容がすぐさま明らかになるとは限らず、彼自身による個人史の語りがさらに進んで行くにつれてその疑問な点に照明が射してくるのである。

対話を中心に据えて「私」の生の来歴を巡る物語を概観すると、まずは、独り身のクスタ・ベン・ルカが自分に適しい女性を教主であるハールーン・アル＝ラシードから紹介され結婚するに至った経緯が描かれ、そして結婚後の彼女の何気ない日常でのありきたりな振舞いとその逆に常軌を逸した奇怪な振舞いに遭遇した体験が、さらに妻の奇怪な行動によって一変したクスタ・ベン・ルカの新たな生の在様が披露されている。彼の生を一変させるほどの大きな転機をもたらした新妻の奇怪な振舞いとは、どのようなものなのか。それは人知の及ばぬ謎を彼女が解明したことである。それ以上に特筆すべきこととして、クス

タ・ベン・ルカの到達した肉体と精神を巡る愛の認識が彼女の非凡な能力と新妻のほのぼのとした凡庸さに触れることで大きく変貌を遂げてついに辿り着いたのだという事実を挙げることができる。

実を言えば、この作品の背後には詩人イエイツとその妻との間に起った実際の出来事が見え隠れしている。もっとも、実際の出来事をそのまま作品に重ね合わせて読む必要が必ずしもあるというわけではないが、因みにその出来事とは、1917年10月20日にジョージ・ハイド＝リーズと結婚したイエイツがその四日後に思いも寄らぬ出来事に遭遇したことである。つまり彼女が霊の言葉を介して自動筆記を始めたのである。イエイツはそれをノートに書き写すが、数年に亘って彼女の自動筆記を記録した数冊のノートは、やがて歴史と人間の内面を類型化した歴史哲学とも呼ぶべき書物『幻想録』*A Vision*（1925）を世に送り出すこととなった。こうした経緯が暗に仄めかされている「ハールーン・アル＝ラシードの贈り物」は1922年に完成し、まずは『幻想録』の序に所収され、やがて詩集『塔』に組み込まれるに至った。

それにしてもタイトルが示しているように、紹介されたその女性を「贈り物」という言葉で表現している点に関してはいささか時代錯誤的なものを感じざるを得ないが、しかし、この作品の時代設定を考えれば、その言葉に対してそれほど違和感を生じないだろう。むしろ「贈り物」(gift)という言葉は〈天賦なるもの〉という意味を帯びていて、そこには偶然でありながらも必然であるような何かが感じられる。

## （2）

「ハールーン・アル＝ラシードの贈り物」に流れる主旋律とは言えば、語り手自らが体得しようとしてどうにも果たせなかったある解き難くも謎めいた問題を巡る回想行為に認められるが、それを底流にして全体の流れを大きく捉えてみると四つの場面から構成されているのがわかる。四部構成のまず初めは、謎めいた秘密の綴られた手紙のある場所に保管しておく旨を語り手のクスタ・

ベン・ルカが部下らしき伝令者に命ずる場面を描き出す。実は手紙は彼の旧き良き友人に読んでもらうために書かれたもので、彼だけがその内容を理解できるとルカは考えている。手紙を通してクスタ・ベン・ルカが伝え残したいこと、つまりそれは現在の人間にも後世に生きる人間にも凡そ理解できないであろう謎めいた神秘にほかならない。新妻の人知を超えた能力によってその謎の内実を知るに至ったクスタ・ベン・ルカは、しかし開陳するのが憚れる今の時代にあって、やがては、然るべき時代に然るべき人物が現れ出て解明されたその謎を理解し受容するであろうと期待を寄せる。かくして然るべき時代の到来するまで、彼女の並外れた能力を媒介にして彼の解き明かした謎めいた神秘は手紙という形で封印されることになる。だが、ことによると、然るべき時代の然るべき人物とは、決して興り得ない時代の、決して存在し得ない人物の謂いであるかもしれない。

謎めいた神秘を解くにまで至った経緯は手紙のなかに綴られているわけだが、第二部以降では解明するまでのその間に起った出来事として老いや愛の問題、新婚当時の妻の身に起った奇怪な現象とその振舞いなどが回想される。第二部を見ると語り手の体験した出来事の一つとして肉体と精神を巡る愛の問題が二人の貴重な対話を通してそれぞれ披露され、そしてクスタ・ベン・ルカの結婚するに適しい女性が紹介される。第三部では対話をきっかけにして結婚するに至ったが、その新妻が不思議な、しかし彼にとっては貴重な幾つかの行動に出るという重大な出来事に遭遇する。こうして最後の第四部に至ると、クスタ・ベン・ルカは回想を終えて自身の身の処し方を述べる。つまり彼女の採った行動を彼なりに解釈し、それに基づいて難解な謎のついに解明されたことを告げ、そして彼は解明された謎が蔵している真実に自身の生を捧げることを宣言する。このように便宜上それぞれ四つの場面に区分けしたが、さらに詳しく見れば各場面は幾つかの局面から成り立っており、しかもそれらの話がまた複雑に絡み合っている。しかし様々な局面から成り立つ四つの場面は錯綜しているにも拘らず、その底流には一つの共通したテーマを巡って展開していくのもまた事実である。物語の複雑に絡み合った「ハールーン・アル＝ラシードの贈り物」は、

その複雑に絡み合う状況のなかで一つのテーマを巡りつつ、そこに一つのまとまった作品として成立している。

では一つのまとまった作品とは何か、一つのテーマとは何か。それは作品を読み進むにつれてその輪郭を顕わにするであろう。

### （3）

すでに述べたように、この詩はクスタ・ベン・ルカが昔の友人に自分の手紙を届けてほしい旨を部下に伝える場面から始まるが、それは直接送られるのではなくやがて読んでくれるであろうことを予想してある場所に人知れず置いておくよう部下に促すのである。忍ばせておくその場所は手紙の内容と相通じた点を有していることが何気なく仄めかされている。

まずは彼はこう語り始める。

私の名はクスタ・ベン・ルカというが、  
アブド・アル＝ラバンに手紙を送りたい。彼とは飲んで騒いだ仲だったが、  
いまでは立派なカリフに仕える学識豊かな宝物係をしている。  
彼の耳だけがそれを聞くに適しい。

この手紙を持って行ってもらいたい、

まずは宝物庫の大きな回廊を通して行け。

そこには歴代カリフの旗が夜の色に染めあげられ、

しかも煌びやかに夜の刺繍のごとく掛けられたまま

軍楽の鳴り響くのを待っている。それから小さな回廊を通り抜け、

紫の地に金文字で書かれた

ビザンチウムの学術書が置いてある処を通して行け。

そして思わず私はこう言いそうになった、

最後に辿り着く処はサッフォーの恋歌を収録した立派な書物のまえだ、と。

だがそこはだめだ。もしもそこに置きでもしたら、

失恋して何もかも上の空になった青年の手が、それに触れても  
手紙だとは気づかず床へ落としてしまうかもしれぬ。

パルメニデスの「論文」のまゝで立ち止まり、  
そこに隠しておけ。カリフたちはこの世の果てるときまで  
サッフォーの恋歌と同じく完璧に保管しておくにちがいない、  
それほど「論文」の名声は高いのだ。

Kusta Ben Luka is my name, I write  
To Abd Al-Rabban; fellow-roysterer once,  
Now the good Caliph's learned Treasurer,  
And for no ear but his.

Carry this letter  
Through the great gallery of the Treasure House  
Where banners of the Caliphs hang, night-coloured  
But brilliant as the night's embroidery,  
And wait war's music; pass the little gallery;  
Pass books of learning from Byzantium  
Written in gold upon a purple stain,  
And pause at last, I was about to say,  
At the great book of Sappho's song; but no,  
For should you leave my letter there, a boy's  
Love-lorn, indifferent hands might come upon it  
And let it fall unnoticed to the floor.  
Pause at the Treatise of Parmenides  
And hide it there, for Caliphs to world's end  
Must keep that perfect, as they keep her song,  
So great its frame.

「飲んで騒いだ仲」であった友人は「カリフ」に仕えて「宝物係」を受け持ち名前をアブド・アル＝ラバンと呼ぶが、その仕事場としている「宝物庫」には「歴代カリフの旗」が掛けられ、「ビザンチウムの学術書」や「サッフォールの恋歌」、それに「パルメニデスの『論文』」などが保管されている。いずれも貴重なものとして後の時代まで保管されるであろうとクスタ・ベン・ルカは信じてやまない。これら「宝物庫」の品々は作品のなかでは一体どのような位置づけがなされているのか。詩の導入部として何気なく歌われているが、実はこの貴重なものすべてがこれから始まる彼の語りのなかで重要な位置を占めることになるのである。「歴代カリフの旗」は戦いを生の証しとする権力（あるいは肉体をその原基に据えた生の一回性）を、「ビザンチウムの学術書」はキリスト教の世界（つまり内なる生の永遠性）を象徴するように、そこには俗なるものと聖なるものとが対置されている。またそれと呼応するかのように、官能的な抒情詩を歌うことで有名な古代ギリシアの女性詩人サッフォールと、世界というものを不変的に持続して凡そ分かつことのできない統一体と捉えた前ソクラテス期の哲学を代表するエレア学派の祖パルメニデスとが、その追求した対象（恋と哲学）からして極めて対照的な人物として位置づけられている。「宝物庫」に眠る貴重なものは、それぞれが相反する対極にありながらも、それでいて優劣を決め難くそれぞれに貴重なのである。こうした視座のもとにイエイツ詩を読むのは、特に中期・後期の作品においては定石とされているが、この詩にあっても相対立した視座がその内容の特質を決定づけている。

両極を射程に入れたその視座に立ったとき、まず浮かび上がってくる問題は何か。それは素朴な疑問として浮上してくる。「歴代カリフの旗」と「ビザンチウムの学術書」をやり過ぎたものの、どうして彼はサッフォールを引き合いに出しながら保管すべき場所を「パルメニデスの『論文』」の脇に決定したのだろうか。なるほどクスタ・ベン・ルカの心を占めていたのがこうした二つの対照的な世界、つまり俗性と聖性、愛と哲学、言葉を換えて言えば生成変化する世界と不変不滅の世界であったということは確かな事実であろう。両者の狭間にあってそのどちらにも囚われている彼は、しかし、手紙の内容を考慮して

か結局は「パルメニデスの『論文』」が保管されている場所に隠しておくよう指示する。したがってその手紙は哲学的な内容を帯びていることが予想される。それにしても、どうしてパルメニデスであってサッフォーではないのか。「宝物庫」の回廊を行くとき、「パルメニデスの『論文』」が置いてある場所に辿り着くには「サッフォーの恋歌を収録した立派な書物」のまえを通り過ぎていかなければならないのは、どうしてなのか。それほどまでに彼は恋歌に囚われているからなのだろうか。あるいは然したる理由もなく単に偶然の成り行きでそのような言葉を吐いただけなのだろうか。もしかすると、彼はサッフォーにそれほど囚われてはいないのかもしれない。要するにサッフォーを引き合いに出したのは偶然であって何ら根拠らしきものは見当たらないと考えるべきであろうか。いずれにしても、どうしてパルメニデスであってサッフォーではないのか、この極めて素朴な疑問はクスタ・ベン・ルカが後ほど語る回想のなかでやがて明らかとなるであろう。

#### （4）

いよいよ「私」は手紙に綴られた内容らしきものを語ろうとするが、さて手紙にはどのようなことが書かれてあるのか、その内容が極めて重要であることを仄めかしながら彼はこう語る。

然るべき時が訪れたとき

羊皮紙に綴ったその手紙は学識豊かな人間にある神秘を開陳するであろう、  
砂漠を漂泊するベドウィン族のほかは

どの歴史編纂者も気づかなかった神秘を。

ペルシアへの使節団やギリシアとの戦いで頭が一杯だったので、  
偉大なハールーン・アル＝ラシードが放って置けなかったものを  
天幕のなかに迎え入れたあの漂泊する民のことは認めるが、  
翼の下を流れる空気のように形もなく



砂漠を漂泊して時に鳥の慧眼を賦与してくれる  
 その真理は私の裡に秘めておくことはできない。  
 やがて時が過ぎて彼らは私のことを大いに語るだろうが、  
 しかし、それは幻想の域を出ないであろう。  
 我らの愛すべきカリフがその理由<sup>わけ</sup>も明かさぬまま  
 ジャファーを死刑に処したあの年を想い起せ。  
 「身に着けていたシャツだけが理由を知ってるなら、  
 シャツを切り裂いて火のなかに投げ込みまおう。」  
 街の連中が知っているのはその言葉だけだった。  
 それにしても、カリフはしばし若返ったように見えた。  
 良心の呵責に悩んでいるのを知られないために  
 わざと若く見られるようにしたのだ、ジャファーの友人たちはそう囁いた。  
 だが、それは裏切り者の考え方だ。

When fitting time has passed  
 The parchment will disclose to some learned man  
 A mystery that else had found no chronicler  
 But the wild Bedouin. Though I approve  
 Those wanderers that welcomed in their tents  
 What great Harun Al-Rashid, occupied  
 With Persian embassy or Grecian war,  
 Must needs neglect, I cannot hide the truth  
 That wandering in a desert, featureless  
 As air under a wing, can give birds wit.  
 In after time they will speak much of me  
 And speak but fantasy. Recall the year  
 When our beloved Caliph put to death  
 His Vizir Jaffer for an unknown reason:

'If but the shirt upon my body knew it  
 I'd tear it off and throw it in the fire.'  
 That speech was all that the town knew, but he  
 Seemed for a while to have grown young again;  
 Seemed so on purpose, muttered Jaffer's friends,  
 That none might know that he was conscience-struck-  
 But that's a traitor's thought.

(11, 19-39)

何よりも手紙が伝えたい事柄とは、もはや謎でしかなかった「ある神秘」に光が充てられたという歓迎されるべき事件についてである。それは、「歴史編纂者」ですら迂闊にもその存在を見出せず、唯一「砂漠を漂泊するベドウィン族」だけが気づいていた、決して言説化され得ない「ある神秘」なのである。この「ある神秘」に気づくか気づかぬかは、そもそも彼らの拠って立つ生それ自体に、あるいはその文化的背景に依ると考えられよう。語られた言葉を書き記して後代に遺すという活字文化を決して「ベドウィン族」は受け容れたりせず、ひたすら口伝えによって連綿と受け継いでいくことを慣わしとした口承文化に彼らの生の基盤を負っている。彼ら砂漠を「漂泊する民」は言説化し難く如何なる言表をもってしても届かない事柄たとえば「ある神秘」を直感しているが、そうした事実さえも言葉に記さずにそのまま「天幕のなかに迎え入れた」、すなわち彼らの心の奥底に秘め持っていた。かたや活字文化に生きてすべては言説をもって分節化しようとする姿勢と、かたや分節化を目指す言説には聊かの価値も置こうとしない姿勢とは、それぞれ永きに互って培われたその伝統を揺るぎないものとして守りつづけている。では活字文化に生きるクスタ・ベン・ルカにあって、この二つの姿勢を前にしたとき、そのとき彼はいかなる態度を採るのか。流浪する「ベドウィン族」のそうした振舞いに対して、クスタ・ベン・ルカはむしろ好意的に容認しながらも、しかし自分の場合はそれを敢えて言葉に書き記すのだと明言する。「翼の下を流れる空気のように形もな

く／砂漠を漂泊して時に鳥の慧眼を賦与してくれる／その真理は私の裡に秘めておくことはできない」とは、まさにそのことを物語っている。ならば、「その真理」とは何か。もとよりそれは、国を守ることに明け暮れていたために「偉大なハールーン・アル＝ラシードが放って置くしかなかったもの」なのだが、そうした「真理」とは一体何を指しているのか。たぶんそれは「ある神秘」に内在する「真理」を指しているにちがいない。しかし、そうした「真理」が「翼の下を流れる空気のように形もなく／砂漠を漂泊して時に鳥の慧眼を賦与してくれる」といった形容を帯びていることを考えると、その指し示されるものが何であるのか、いまは即断できない。ただ現段階で言えることは、分節化し難く荒唐無稽な状況のなかで、時にそこから超越してあるべき何かを捉えるであろう「鳥の慧眼」が「真理」の内実を明らかにする鍵となるだろう。

いずれ開陳されるであろう「ある神秘」と「真理」に関連してもう一つ疑問が浮かぶ。やがて「私のこと」について語るであろう彼ら「漂泊する民」すなわち「ベドウィン族」にあって、その彼らの語る「私のこと」が「幻想の域を出ないだろう」とは、どういうことなのか。それは「彼ら」が「私」の伝えたいと願う「ある神秘」も「真理」も詳らかにしないことを示唆しているのだろうか。つまり「彼ら」は直接それ自体について語ることはなく、「ある神秘」とその中核を成す「真理」に「私」が辿り着いたという顛末（「私のこと」）について語るにすぎないことを暗に示しているのだろうか。「私」がそれらを言葉に書き記すという行為は、「彼ら」からしてみれば、たぶん「ある神秘」や「真理」それ自体からはほど遠く、まさに「幻想」という霧に包み込んで単に理想化しているにすぎない。「幻想の域を出ないだろう」とは、「私」のこうした行為と「彼ら」が厳しく一線を画していることの証左にほかならない。そこには「漂泊する民」（＝「ベドウィン族」）がひたすら守ってきた口承文化の伝統が息づいている。この点に関して実に興味深いのは、口承文化に生きて「漂泊する民」の語るという行為と活字文化に生きる人間の書き記すという行為における差異、とりわけ言説化の困難な問題にあっては両者の間に隔絶の差が生じていること、そのことを厳然たる事実としてクスタ・ベン・ルカが受け容れ

るところにある。さらに興味深い点として「彼ら」が厳しく一線を画しているという行為を挙げることができる。それは「彼ら」自らが意識的に及んだ行為ではなく、「私」クスタ・ベン・ルカが一線を画す「彼ら」を自ら想定して採らせた姿勢と考えられる。敢えて言うならば、彼は「ある神秘」や「真理」の純粋な言説化への絶対的な不可能性を認識しているがゆえに、彼はそのように想定したにちがいない。

ところで、このように「彼ら」を「ベドウィン族」と見なして論を進めたが、いま一度その視点を変えることで、そこに何か別の見方が読み取れないだろうか。別の見方の可能であることを踏まえて言えば、ことによると「彼ら」とは後世の人間、記された言葉をひたすら信奉する人間、いうなれば近代の人間の典型を、すなわちクスタ・ベン・ルカの生きる世界を受け継ぐであろう後世の人間を暗に示していると考えられるかもしれない。そうであるとすれば、その対極にあるのが「ベドウィン族」となり、したがって「幻想の域を出ないだろう」といった件りはその内容を大きく変更しなくてはならないだろう。いずれにしてもこの時点に限って言えば、「彼ら」はそのどちらにもなり得る可能性を秘めている。

かくして「ある神秘」と「真理」を巡ったクスタ・ベン・ルカの思いは巡りめぐって唐突にも過去のある不可解な事件に逢着する。当時、政治の実権を握っていた宰相のジャファーが803年の1月にその理由もわからぬまま殺害された事件に彼は思い至る。しかし、一説にはその理由として、当時ジャファーという要職を手中に納めて絶大な権力を握るに至ったバルマク家がますます繁栄し、やがてはカリフの地位を脅かすのではないかとアル＝ラシードが危惧したためだとも伝えられている。その真相は闇のなかだが、それにしても何故彼は前後の脈絡もなく突如このような事件を引き合いに出したのだろうか。それはジャファーを殺害したときアル＝ラシードが「しばし若返ったように見えた」という事実を強調するためであろうか。一見何気なく採りあげたエピソードとして回想しているようだが、そこにはこの詩を読み解く重要な鍵が一つとして潜んでいる。「戦い」と「肉体」と「若さ」、これらの言葉がいかに作品のテーマと

密接な関係を有しているか、このことは作品を読み進むにつれてやがて理解されよう。

## （5）

いよいよ詩が本格的に展開していくのに先立ってクスタ・ベン・ルカは自身の生涯のうち、この上もなく貴重な体験をしたことを伝える。それはアル＝ラシードとの対話に見出されるが、その対話には貴重な体験とともに彼の人生を一変させてしまうほど仰天する事件も語られている。

……。私としては、ある体験ができただけで充分だ。

その年の夏が始まる頃、

この世の王のなかで一番権力を誇る王が

廷臣のながで一番無視されている者に近寄ってきて、

大理石で造った噴水の縁に腰をおろし

池に泳ぐ金魚たちの群れのなかに手を浸した。

そのとき、ある対話が交わされた。

それは、すべての歴史編纂者に私が託していることで、

どのようにしたら気性の烈しい気高き者たちが自身の苦渋から脱して

蜜蜂の巣を見つけ出せるかを証明するための対話であった。

.... Enough for me

That in the early summer of the year

The mightiest of the princes of the world

Came to the least considered of his courtiers;

Sat down upon the fountain's marble edge,

One hand amid the goldfish in the pool;

And thereupon a colloquy took place

That I commend to all the chroniclers  
 To show how violent great hearts can lose  
 Their bitterness and find the honeycomb.

(11., 39-48)

「一番権力を誇る王」であるカリフと、かたや「廷臣のなかで一番無視されている者」であるクスタ・ベン・ルカとが交わす「ある対話」は愛を巡って対蹠的な両極の考え方を披露しながらその中心的なテーマを追求している。つまり相対立した関係性を保ったまま、二人は愛におけるあるべき生の姿を追求するのである。「どのようにしたら気性の烈しい気高き者たちが自身の苦渋から脱して／蜜蜂の巣を見つけ出せるか」、この疑問に附された中心的なテーマに解答を見出すのが二人の対話の目ざすところであるが、「気性の烈しい気高き者たち」の抱えた生の「苦渋」とその対極にある「蜜蜂の巣」の二律背反は果してどのような展開を見せるのだろうか。

これまで生きてきた彼らの生がゆえに、そして生来の資質がゆえに積み重ねられた生の証したる「苦渋」を自身の裡に抱えてきた「気性の烈しい気高き者たち」がさらなる生の飛躍を遠望するとき、飛躍さるべきその地平は極めて明澄なものとして拓かれてくるであろう。彼らの果たすべき生の問題は、俗世に塗れた生とその彼らの資質が自分の身に染み込ませた「苦渋」を払拭してこれまでの自分とは対極にあるもの、つまり「蜜蜂の巣」をいかに見つけ出せるか否かにある。生の「苦渋」から生の甘美さ（「蜜蜂の巣」）への転位は、現象的に見れば、生における一枚岩的で極めて単純な変容を反映しているにすぎないと考えられるが、しかし、そうした一方通行的な転位も対話を通じてより複雑な様相を帯び新たな事態が招来される可能性を孕むといったアイロニカルにも重層的な転位へと変容し得る。別の言い方をすれば、それは人間の生が〈存在〉へ至るべく自身の現在から脱け出してあるべき生を全うするという実存的な生の様態として捉えられるであろう。

果して「気性の烈しい気高き者たち」とは何者なのか。「苦渋」の対極に位

置する「蜜蜂の巣」とは何を象徴したものなのか。彼らは「内戦時の瞑想」‘Meditations in a Time of Civil War’ という詩のなかで讃えられたあの「烈しい男たち」を彷彿とさせるが、たとえばクスタ・ベン・ルカやカリフはこの「気性の烈しい気高き者たち」に含むことができるだろうか。新たな事態といい、「気性の烈しい気高き者たち」といい、また「苦渋」やら「蜜蜂の巣」やら、いずれも現時点では意味の所在を明確にするのは難しいが、対話と彼自身の述懐を通じてやがてはその内実が明らかとなるだろう。

貴重な「ある体験」がアル＝ラシードとの対話に見出されるとはすでに述べた通りだが、ことによると「ある体験」こそ二人の対話そのものを指していると言えるかもしれない。こうして貴重な体験ともいうべき「ある対話」がいよいよ実際に交わされる。まずは話の口火を切ってアル＝ラシードがかねがね気になっていたことをクスタ・ベン・ルカに打ち明ける。それはクスタ・ベン・ルカに纏わる個人的な問題に関してである。

「私はほっそりとした花嫁を家に招き入れた。

『花嫁は春が来たら取りかえろ』という諺を知っているだろう。

こうして幸せに浸っていた花嫁と私は、

夕方になるとジャスミンの枝が揺れているというのに

おまえがこれらの道をまだ花嫁もなく歩いているのかと思うと

耐えられないのだ。」

「私はますます年をとっていきます。」

‘I have brought a slender bride into the house;

You know the saying, “Change the bride with spring,”

And she and I, being sunk in happiness,

Cannot endure to think you tread these paths,

When evening stirs the jasmine bough, and yet

Are brideless.'

'I am falling into years.'

(II., 49-54)

いまだ独り身の彼に向かって「花嫁は春が来たら取りかえろ」という諺を振りかざしながらアル＝ラシードは結婚を促すが、それに対してクスタ・ベン・ルカは時の流れのままに生きる自身を前にして何をどうするというともなく、ただ「私はますます年をとっていきます」とだけ呟くのである。さらにアル＝ラシードは自分の思うところを大胆にもこう語る。

「だが、おまえや私のような人間は  
 惰性で生きている人間どもと同じように年老いては見えまい。  
 毎日、私は鷹を連れて川の辺まで馬を駆ったり、  
 鎖帷子を背負ったり、  
 時には女に言い寄ったりもするのだ。敵も  
 獵鳥も女も同じことを二度はしないものだ。  
 だから狩人はその眼に  
 若さを装うものを宿しているのだ。  
 肉体から湧き出て肉体へと落ちていく詩人の思いも、  
 この一途な噴水が青空のなかへ迷い込んだかと思えば  
 百合の葉や魚の鱗に飛沫をかけたりするように、  
 擬態を装うものであると言えよか。」

'But such as you and I do not seem old  
 Like men who live by habit. Every day  
 I ride with falcon to the river's edge  
 Or carry the ringed mail upon my back,



Or court a woman; neither enemy,  
 Game-bird, nor woman does the same thing twice;  
 And so a hunter carries in the eye  
 A mimicry of youth. Can poet's thought  
 That springs from body and in body falls  
 Like this pure jet, now lost amid blue sky,  
 Now bathing lily leaf and fish's scale,  
 Be mimicry?

(11, 55-66)

どうやら二人は、とりわけクスタ・ベン・ルカに限っては老人と言わないまでも、もはや若くはない年齢に達しているようである。絶えず若さを保つことを心がけているアル＝ラシードは、たとえば「狩り」をしたり「戦い」に挑んだり女に「恋」して口説いたりすることによって若くありつづけようとする。「敵も／獵鳥も女も同じことを二度はしないものだ」とアル＝ラシードが豪語するように、生における一回性に自らの命を賭けた振舞いとして「狩り」や「戦い」や「恋」を捉える彼は、その一回性のうちに生命に充ちた「若さ」を見て取ろうとする。そうであってみれば、「だから狩人はその眼に／若さを装うものを宿しているのだ」と彼は自信ありげに語るのである。たとえその「狩人」が年老いていたとしても、一回勝負の「狩り」をする限りその行為には「若さ」を彷彿とさせるものが現れてくる。「狩り」と同様に「戦い」も「恋」も決して繰り返しの利かない、その時その時が命運を決める。そのように瞬間を生きることによって「狩り」をする者も「戦い」に挑む者も「恋」する者も「若さ」をその都度保つことができる。その一方で、時の流れのままに「惰性で生きている人間ども」は瞬間や生の一回性の重要さに無頓着ですらある。そうした彼らは「二度は同じことをしない」どころか、「惰性」に任せて何ら飛躍のない生を平気で何度でも繰り返すのである。生の単なる連続性や反復ではなく、生の一回性や生の非連続性にこそ飛躍さるべき真の「若さ」は出来す

るのだと、そうアル＝ラシードは考える。

こうしてアル＝ラシードが「だから狩人はその眼に／若さを装うものを宿しているのだ」と結論めいた意見を吐くとき、さて「若さ」の秘訣が「その眼」に宿されてあるということ、それはどういう意味なのか。もはや若くはない人間の眼にも「若さ」を感じさせるものが本当に宿るのであろうか。「狩人」の「その眼」に宿した「若さを装うもの」とは、肉体的なものから離れて精神的なものを強調してそう言うのだろうか。「その眼」に見受けられるものとは、思うに、ただ単に肉体的なものや精神的なものの属性にはないもの、あるいは肉体も精神も超越したもの、敢えて言えば〈存在〉の原初的な奥処から湧出する生への盲目的な衝動を指してはいないだろうか。いや、むしろその逆に肉体的でもあれば精神的でもあるものと規定したとしても、それは同じことを意味するであろう。「眼」だけは他の身体的な器官とはちがってそれほど老いを感じさせないのかもしれない。いわゆる身体的な「老い」や「若さ」を超越してまさに原初的な生への衝動を感じさせるようなものが「若さを装うもの」なのである。「眼」の輝きだけは、時の移ろいとともには衰えることなく、むしろ移ろう時の流れを超えて原初的な生への衝動が醸し出す「若さ」を鮮やかに発露させることができるにちがいない。しかも、そうした原初的な生に衝き動かされて発露する「若さ」は、限りある生がまさに生の一回性、非連続性を生きおこせたとき、初めてその輝きを放つという逆説を孕んでいる。

それと同じように「詩人の思い」もまた「若さ」を装う術を身につけているのだとアル＝ラシードは語る。その「擬態」は単純すぎるほどに一途な思いに支えられていると言う。それを彼は天空へ向けて真直ぐに噴き上げる「噴水」に喩えるが、「噴水」に見立てて称揚された一途な「詩人の思い」はその「思い」を持続しつづける動因力を内面とは対極にある物質性（＝「肉体」）に温存しているのである。改めるまでもなく「詩人の思い」が「肉体から湧き出て肉体へと落ちていく」ということは、その根源と究極を「肉体」に負っているわけだが、そこには、相反する両極が分裂せずに一体となっている。「若さを装うもの」が肉体的でもあれば精神的なものでもあるとされる所以である。こ

うして見ると、カリフは「狩人」には肉体性を「詩人」には精神性を第一に称揚しているようでいてその実、それとは対蹠的な性格を付与することによって彼らの生を特徴づけている。正確に言えば、肉体性がいかに精神性に依拠しているか、また精神性がいかに肉体性に依拠しているか。つまり両極における相補的な関係に何よりもの重要性を見て取るのであろう。

ここに彼は再び取り戻すことのできない「若さ」を問題の中心に据えて一回性としての生を強調する。「狩人」は必要とあらば自身の「眼」に「若さを装うもの」を漂わせる術を身につけているが、それは自身の「眼」から発する〈輝き〉を鋭くして若く見せること、つまり「擬態」によって可能とされる。「詩人の思い」もまた「狩人」が持つ「その眼」と同じく「擬態」を通して己の若き生を全うするのだと彼は大胆にも主張する。「詩人の思い」は作品を通して現実から飛躍できること、作品という「擬態」を纏うことによって現実からの呪縛を解かれて自由に「若さ」を装うことができるのである。

この肉体と精神を巡る生の所在に向けた大胆な、しかし微妙で繊細な意見に対してクスタ・ベン・ルカは、家臣であることを意識してか、むしろ穏やかな身の処し方に思いを馳せる。すべてを肉体に帰する見方に対しては断固として反対する考えを一見述べているようでありながら、まるでカリフの言葉の力に誘い込まれるかのように自身の考えを微妙で繊細なものに仕立て上げるのである。アル＝ラシードと同様に、両極のうちの一端にだけ傾斜するという志向を自らに禁じている。

「たとえ私たちの魂が

狩りもしなければ歌いもしない魂より

ずっと肉体の表面に近づいていたとしても、それがどうなんでしょう。

肉体に宿された若さでなく、魂に秘られた若さこそ

我々の面立ちに現れてくるのです。私の蝋燭の焰は、

私のランタンがあなた様の祖父の治世に造られたことが判るほど

忠実に燃えております。」

「だが、ジャスミンの季節は我々の血を生き生きとさせてくれるぞ。」

‘What matter if our souls  
Are nearer to the surface of the body  
Than souls that start no game and turn no rhyme!  
The soul’s own youth and not the body’s youth  
Shows through our lineaments. My candle’s bright,  
My lantern is too loyal not to show  
That it was made in your great father’s reign.’

‘And yet the jasmine season warms our blood.’

(11., 66-73)

「狩りもしなければ歌もうたわぬ魂」と、このようにクスタ・ベン・ルカの吐く言葉はアル＝ラシードおよびルカ自らが行っている振舞いの対極を指すのであってみれば、「狩りもしない魂」つまり肉体から遊離してもっぱら自身の裡で充足しているような「魂」とは、〈狩人の魂〉に対してその対極にある魂にほかならない。また「歌いもしない魂」つまり自身の思いを決して言葉にして歌おうとはしない「魂」とは、もちろん〈詩人の魂〉の対極にある「魂」を指していると言えよう。要するにそれらは一枚岩的な単衣を身に纏った「魂」にすぎない。しかし肉体を基盤にして生きながらも同時に精神にも重きを置く「狩人」として、また精神や感情といった内面性を基盤にしながらも同時に肉体にも重きを置く「詩人」として生きる「私たちの魂」は決してそうではない。したがって「たとえ私たちの魂が／狩りもしなければ歌いもしない魂より／ずっと肉体の表面に近づいていたとしても」なんら不思議ではなく、むしろ至極当然である。

ある意味では対蹠的であると同時に共通した点を持つ「私たちの魂」につい

て、クスタ・ベン・ルカはその機微をこのように輪郭づけようとする。肉体と精神といった両極を前にして即座にそのどちらか一方だけを生の根拠とすることを禁じた「私たちの魂」は、にも拘らず、その主たる根拠をアル＝ラシードが肉体に、クスタ・ベン・ルカが魂に置くのを前提にしたうえで、究極的にはその両極のどちらにも生の根拠を置くといった特異な性格を有した「魂」であるのだ。「若さ」を巡ってルカが「肉体に宿された若さでなく／魂に秘められた若さこそ／私たちの面立ちから現れてくるのです」と説明するように、両極が絡み合うことで「私たちの魂」は成立している。「魂」は「肉体」を凌駕し得るということ、「若さ」の源泉は「魂」にあるということ、こうした独特な考えをルカは持っている。「若さ」とはもちろん「肉体」に宿って「肉体」から迸り出るものであり人間はそれを眼にしてきたが、ルカの主張する「若さ」とはこうした「肉体」それ自体に見られる「若さ」ではない。つまり身体そのものが表す「若さ」ではなく、「肉体」の表層に漂うような、とりわけ顔に現れる表情としての「面立ち」が「若さ」を決定づけるのである。そしてその「若さ」はまずもって「魂」が培ったものでなければならない。だからと言って「肉体」を全面的に否定しているわけではなく、飽くまでもその「面立ち」は肉体を媒介にして現れてくる。「肉体」は「魂」にとっても「若さ」にとってもなくてはならない生の原基とされる。それゆえ「私の蠟燭の焰」が古びた「ランタン」の細部をいまもなお鮮明に照らしつづけているのも、その「焰」に「若さ」が宿っているからにほかならない。「魂」から発して「肉体」（という「面立ち」）に漂う「若さ」こそ真に「若さ」と言えるのだと彼は考えている。それは時間を超越して生きつづけることを物語っていよう。だとすれば、唯一この点が「若さ」を生非連続性のうちに見て取っていたカリフと見解を異にするところである。

ルカの「ランタン」への言及に呼応してアル＝ラシードは、冷やかにもルカの見解とは裾を分かつために一言だけ、しかも揶揄するような発言をするに留まる。「我々の血を生き生きと」若々しくさせるのは、時を超越した「魂」などではなく、「ジャスミン」の薫り漂うひと時を措いてほかにない、と事もな

げに突き放すのである。巡りゆく季節のなかで「ジャスミン」の花咲く春こそ恋の若々しく花咲く季節でもあると彼は主張する。両極のどちらにも生の根拠を置いていたはずのカリフは、このように突然一方の極に向かおうとするが、クスタ・ベン・ルカも俄かに一方の極に染まろうとする。

かくして一回性の愛、生の非連続性を信奉するカリフに対して、自分は愛における永遠性を信じたいとクスタ・ベン・ルカは控え目に表明している。しかしながら、大胆にして確信に満ち溢れたカリフを前にして自身の感懷を述べるクスタ・ベン・ルカの口吻は自信ありげでいて頼りなげで、いつしか不安に包み込まれてしまう。

「偉大なる王よ、思いつくままに話すのをお許してください。

あなた様は恋には季節があるとお考えになり、

春がもたらしたものを春が運び去るのならば

心はなんら痛手を受けるに及ばぬと考えておられます。しかし

アラビアの精神にはそぐわない

ビザンチウムの信仰を受け入れた私としましては、

花嫁を選ぶとしましたなら、いつまでも寄り添ってくれる女性を選びます。

もしも花嫁の眼が私の眼に向かって輝かずに

もっと若い男にだけ輝くのであれば、

私の心は日増しに崩れ落ちていき

何の救いも見つけられなくなってしまうでしょう。」

‘Great prince, forgive the freedom of my speech:

You think that love has seasons, and you think

That if the spring bear off what the spring gave

The heart need suffer no defeat; but I

Who have accepted the Byzantine faith,

That seems unnatural to Arabian minds,

Think when I choose a bride I choose for ever;  
And if her eye should not grow bright for mine  
Or brighten only for some younger eye,  
My heart could never turn from daily ruin,  
Nor find a remedy.'

(II., 73-84)

「ビザンチウムの信仰」、つまりキリスト教を信奉するルカは、愛の問題に関して「花嫁は春が来たら取りかえろ」という諺を信じてやまず「アラビアの精神」に生きるアル＝ラシードとは正反対の立場を採っている。思いのままに愛に生きる生き方を嫌って彼は決して変わることのない愛を信じたいと願うばかりである。しかし時間のなかを生きる宿命からは逃れられぬ彼もカリフの言葉が気にならないわけでもない。彼クスタ・ベン・ルカは自身の信念を吐露すると同時にすぐさま自信なさげに不安な気持ちを漏らしてしまう。やがて時が移ろいゆくにつれて、彼女が自分より若い男のほうに愛情を注いだとしたならば、「私の心」は持ち堪えられずに当惑してしまうであろう。そのように不安に揺れ動くルカは、愛の永遠なることを秘かに願うものの、時の侵食をつい意識してしまい、自身の抱く愛というものがなんと脆弱であるかを自ら晒け出してしまうのである。愛の永遠性を思えば思うほど、やがては時がそれを破壊しにやって来るだろうという不安はいや増しに深くなる。

婚期を逸してすでに若くはないルカのそうした一途なうちにも揺れ動く思いを不憫に感じてか、アル＝ラシードは、彼に適しい花嫁を紹介しようと話を持ちかける。

「そうは言うが、もしも私が  
女を見つけてあげたら、おまえはどうする。その女は  
あの昔から難解な謎に注いできたおまえの渴望を分かち合い、  
我々の生の向こう側に眼を凝らそうと精神を集中することができるのだ。

そうした集中力を理解しない眼はほとんど輝いていないように見えるだろう。  
 だが、この女は全身が生命に充ち溢れており、  
 若さの泉そのものに見えるのだ。」

‘But what if I

Have lit upon a woman who so shares  
 Your thirst for those old crabbed mysteries,  
 So strains to look beyond our life, an eye  
 That never knew that strain would scarce seem bright,  
 And yet herself can seem youth's very fountain,  
 Being all brimmed with life?’

(ll., 84-90)

ルカに適しい花嫁は、これまで追求してきた「あの難解な謎」を解き明かしたいというルカの願望に深い理解を示していること、そして「生の向こう側に眼を凝らそうと」して集中力と情熱を絶やさずに持ちつづけていられること、こうした点を魅力にアル＝ラシードは花嫁を紹介するのである。現実のなかでは見出すことの難しい「あの難解な謎」をどうしても解明したいという彼の宿願と、それを解明することができる彼女の能力とが二人を結ぶ大きな機縁となっている。一般のそれとは異なった精神世界に生きる女性をルカに紹介しようとするカリフは、しかしながら、精神性ばかりでなく生命そのものにも充ち溢れていることを強調する。ますます年を取って老いてゆくクスタ・ベン・ルカに向かって「この女は全身が生命に充ち溢れており、／若さの泉そのものに見えるのだ」と彼女を讃美する。彼女は生命の溢れんばかりに漲る、まさに〈命の泉〉のごとく瑞々しい肉体を身に纏っている。精神と肉体が調和してここにひとりの魅力的な女性がいるのだと、そうカリフは言いたげである。再び彼は両極のどちらにも生の根拠を置く見方を称賛してさながら前言を否定するかのような素振りを見せている。



このようにカリフの指す精神性が肉体を重視した特殊な面を帯びているが、それはどうしてなのか。彼もまたそれを目指すのだろうか。精神と肉体が調和した女性は、ルカにこそ適しいのであってみれば、紹介者であるアル＝ラシードが肉体性を孕んだ精神を目指すはずもないだろう。したがってここでの件りはルカの個性を前提にしてそう発言されたにちががなく、クスタ・ベン・ルカにこそその特殊なるものへの性向を読み取るべきかもしれない。ともあれ、こうした問題は詩を読み進めるにつれていずれ明らかになるであろう。

さて二人が解き明かすべき「あの難解な謎」とは果して何であろうか。カリフの言葉を借りて言えば、その「謎」はどうやら「我々の生の向こう側」に見出される何かであるようだ。現実には見出し難い「あの難解な謎」、それは文字に記して言説化し難い何か、活字文化の定着した世界ではなく口承文化を生きる世界にこそ見出される「謎」である。それを直観できるのが「砂漠を漂泊するベドウィン族」であるのは言うまでもないが、「謎」そのものに関してはいまの時点ではわからない。このことも、さらに対話が進むにつれてやがて明らかになるであろう。

まだ核心には辿り着いていない、こうした何気ない対話にあって、しかし、カリフのこれまでの発言には一筋縄では捉えられないような複雑な策略が隠されているかに思われる。精神性に固執するルカに対して、それを認めつつも肉体のいかに重要であるかを、カリフはいつの間にか是認させてしまおうとする彼のしたたかな狡智が見て取れないだろうか。つまりカリフが精神の「そうした集中力を理解しない眼はほとんど輝いていないように見えるだろう」と語るとき、精神のみならず肉体をも生の証として刻み込もうとしているのが窺える。一見すると、単純なようでいて、実はカリフはルカの内面を見抜いてしまうほどに深い見識を有しているのかもしれない。このこともまた、後ほど明らかにされるであろう。

カリフの言説に何気なく吐露されている見識の深さには気づかず、クスタ・ベン・ルカはその女性と互いに共有できるかもしれない精神世界に生きてしかも「あの難解な謎」を解明できるだろうと期待を弾ませて彼の話を受け容れよ

うとする。

「そのお話が本当でしたら、  
人生の贈り物のうちで最良のものを見つけたことになりましょう、  
男の魂や女の魂を  
他の魂にではなく、それぞれ本来の魂に創りあげる  
あの不可思議な世界に住む仲間として。」

‘Were it but true  
I would have found the best that life can give,  
Companionship in those mysterious things  
That make a man’s soul or a woman’s soul  
Itself and not some other soul.’

(II., 90-94)

こうしてアル＝ラシードからの紹介を快く受け容れた彼は、しかし、そのとき理解し難い奇妙なことを口走る。自分は現実から離れて「あの不可思議な世界に住む」人間であると自ら明言するが、その世界にあっては人間の魂、すなわち「男の魂や女の魂」は「それぞれ本来の魂」へと成就すべく創りあげられる、とクスタ・ベン・ルカは考える。こうした彼の考えは決して破格なものではなく、むしろ理解され得るものであろう。しかし、その言説に対して「男の魂や女の魂」を「他の魂」へと鍛え上げるのではないと発語するとき、果たして否定された「他の魂」とはいかなるものなのか、俄かに理解し難くなる。「本来の魂」と「他の魂」とが同じでないとするれば、それらはどのような意味を有してどのような関係にあるのか。前者がそれぞれ「男の魂」そのもの、「女の魂」そのもの、つまりそれ自体で充足して精神性を基調にした姿を意味するのであるとするれば、後者はそれぞれ自身とは対極にあるものを指すのであろうか。たとえばそれは、〈我〉と〈汝〉の関係を基にして考えた場合、自

己が他者になることを物語っているのだろうか。つまり「男の魂」と「女の魂」とが結ばれていく愛の過程においてそれぞれが〈他者の生〉を生きているのであるか。「あの不可思議な世界」において創られる「本来の魂」とは、「男の魂」と「女の魂」が互いに密接な関係を持って、すなわち愛の関係を通して変容したそれではなく、「あの難解な謎」を二人で解明する、いうなれば精神的などでも形容すべき「仲間」といった一枚岩的な関係性のなかで、それぞれが充足したあるべき姿に変容して生まれた「魂」のことである。それに対して「他の魂」とは、〈現実の世界〉のなかで繰り広げられるべき愛における〈我〉と〈汝〉の、とりわけ肉体的な関係を通して「男の魂」と「女の魂」が互いに〈他者の生〉を生きることによって変身した「魂」にほかならない。そこには肉体も精神も取り込んだ重層的な関係が窺える。しかし「本来の魂」がもっぱら精神性に偏向しているならば、それに連動して「他の魂」とは単に男と女の肉体的な関係から生れたものと見なすことも可能だろう。

こうしたことから「本来の魂」と「他の魂」とを対置してその関係に眼を向けてみると、それらは精神と肉体、智と愛の二律背反的な関係を有しているのがわかる。と同時に二律背反的な関係は「あの不可思議な世界」と〈現実の世界〉との関係にも見られる。しかし、実際の問題としてルカにはそのような二律背反から二者択一への途は許されないはずである。結局、彼はこの二律背反を生きなければならない。二律背反がいわば弁証法的に統合された地平として展開するとき、そのとき彼は〈現実の世界〉において何の不安もなく彼女との愛情を育みつつ「あの不可思議な世界」のなかで「あの難解な謎」の解明に日々を捧げることができであろう。あるいは二律背反は統合されずしてまさに分裂した状況を露呈するとき、彼はあれかこれかと思いあぐねてもはや生の新たな一步を踏み込めなくなるだろう。二律背反を生きなければならないとは、まさに後者の謂いにほかならない。

二者択一は許されぬ問題ではあるものの、敢えて次のような疑問を呈してみるのは意味のあることであろう。すなわち、そもそもクスタ・ベン・ルカにとっては、両極端な関係にあるそれら世界のどちらがより重要なのか。「男の魂や

女の魂を／他の魂にではなく、それぞれ本来の魂に創りあげる／あの不可思議な世界」のほうがより重要なのだろうか。だとすると、二人の愛を育む〈現実の世界〉はどうなるのか。「あの不可思議な世界」か〈現実の世界〉か、「本来の魂」か「他の魂」かという二者択一の問題とは別に、もう一つの局面が可能性として浮上してくる。つまり両極の狭間には、「本来の魂」からも「他の魂」からも見放されてクスタ・ベン・ルカの生の果つべき破綻が潜在している。生の破綻ばかりか、彼の不安も、生の新たな一步という飛躍もすべてこの二律背反的な関係性のなかで潜勢的に胎動している。彼の冷静に発語する言葉は両極を跨ぎ超せずに揺蕩する自身を予兆するかのようである。

さてカリフが最後に吐く言葉は前言で仄めかされた彼の狡智にたけた見識の深さから一転して、まるでそれを否定するかのような極端な考えをルカに投げつけている。愛における普遍性を信ずるクスタ・ベン・ルカを受け容れながらも、彼はそれと対立する立場に立つことを表明するのである。それは何故であろうか。これまでの語り口を振り返ってみると、どうやら彼の発言には何かあるひとつの意図が隠されているのではないかと予感される。愛の問題を巡ってカリフは他者への寛容を示しながらも、自身においては妥協を知らぬ頑なな態度をはっきりと採る。

「その愛は

現世においても来世においても、きっと

変わらぬまま平穏な日々を送るにちがいない、

哲学者がこぞってその愛を讃えるのも当然のことだ。

だが哲学者ではない私が、それと対立する愛を讃えても罰当たりにはなるまい。

孔雀とその連れが、野生の牡鹿と牝鹿が

欲情に駆られたかのように身をくねらせるのを想像しただけで

私の欲情はいっそう烈しくなる。接吻は

人間の、不変なる魂への嘲笑なのだ。」

‘That love  
Must needs be in this litre and in what follows  
Unchanging and at peace, and it is right  
Every philosopher should praise that love.  
But I being none can praise its opposite.  
It makes my passion stronger but to think  
Like passion stirs the peacock and his mate,  
The wild stag and the doe; that mouth to mouth  
Is a man’s mockery of the changeless soul.’

(II., 94-102)

カリフが愛にその思いを巡らせるとき、「哲学者」が讃える普遍的な精神的愛、瞬間に生きて欲情のままに生きる愛、いわゆるエロスとアガペーとして愛を二極に分断する彼の考え方は徹底を窮める。「変らぬまま平穏な日々を送る」愛はルカが受け容れ、野生の動物のように束の間の「欲情」に生きる愛はアル＝ラシードが引き受けて、さらに彼は「接吻は／人間の、不変なる魂への嘲笑なのだ」と魂の普遍性に対して挑戦的な発言をする。このように自身と異なる見解を前にしたとき、他者には寛容を示しながらも自身に及んでは執拗なまでに固執して厳しく峻拒する頑な態度を採っている。この事態はどう説明すればいいのだろうか。なぜアル＝ラシードは自身の考えに賛同するようルカに迫らないのだろうか。ここにもまた、アル＝ラシードの巧みに隠された意図があるのではないかと予感される。

## (6)

かくして対話は終り、次にはクスタ・ベン・ルカの回想といま現在の思いが吐露される。遅れた結婚は喜びもひとしお深く感じられるが、その喜びをさら

に深くしてくれたのは二人の愛とは直接結びつかないような〈ある事〉があったからでもあるのは言うまでもない。もちろん〈ある事〉とは、自分が究明しようとして未だ果たせない「あの難解な謎」を、彼女がその究明に向けて協力してくれるという事実を指す。しかし、こうした明るい状況にあっても、どういうわけか彼は再び新たな不安を覚えてしまう。二人が結婚するに至った動機を巡ってルカは不安を隠せない。彼の不安は肯定的な確信に到達すると決まって生じてくるようだ。

こうしてカリフの御恵みによって知り合えた女のお蔭で  
私のはちきれそうな春が知っていた花よりも  
もっと多くの花を秋の冷気から揺り起す力が与えられたのである。  
ひとりの娘が母親の家の窓辺に腰かけて  
毎日私が道を行き来するのを眺めていた。  
私の信じ難いやりし日々を耳にすると、彼女はある信じ難くも  
抜き差しならぬ事態が私の身に起っているのを想像した。  
ひとの姿を醜くする時が忍び寄ってきたので、なおさらのこと  
女が面倒をみてやらなければいけないと思ったのである。  
それにしても私の眼を眩惑し、  
彼女の幻想を混乱させて世話しようと思い立たせたのは  
私への愛ゆえか、ある秘密そのものへの愛ゆえだったのか。

And thereupon his bounty gave what now  
Can shake more blossom from autumnal chill  
Than all my bursting springtime knew. A girl  
Perched in some window of her mother's house  
Had watched my daily passage to and fro;  
Had heard impossible history of my past;  
Imagined some impossible history

Lived at my side; thought time's disfiguring touch

Gave but more reason for a woman's care.

Yet was it love of me, or was it love

Of the stark mystery that has dazed my sight,

Perplexed her fantasy and planned her care.?

(II., 103-114)

愛の喜びに浸る青春の「はちきれそうな春」からはすでに遠く久しく、もはや「秋の冷氣」の漂う老年を迎えてしまったが、にも拘らず逆に愛の喜びが深まっていったことを彼は回想する。彼女はと言えば、相手の衰えゆく老齡がゆえに芽生え出した母性的な愛情も加わって、身の回りの世話をしてやらなければならないと思い結婚に踏みきった。結婚のきっかけはそれだけではなく、常軌を逸した過去を持つ彼の身に「ある信じ難くも／抜き差しならぬ事態」が起っているのを身近に感じたこともまた結婚を決めた動機となっている。その「抜き差しならぬ事態」とは、ほかならぬ「あの難解な謎」の究明に日夜クスタ・ベン・ルカが腐心していることである。

では彼が踏みきった結婚の動機は本当のところ、一体どこにあるのか。彼女は「我々の生の向こう側に眼を凝らそうと精神を集中することができ」、しかも「全身が生命に充ち溢れており、／若さの泉そのものに見えるのだ」というカリフの評価がその動機となったのか、それとも自身を「それぞれ本来の魂に創りあげる／あの不可思議な世界に住む仲間として」ルカ自身彼女を認めたことが動機となったのか、定かでないように思われる。こうした問いに答えるまえに、ルカがその動機を巡っていかに動揺していたか、その心の揺れに注目すべきであろう。彼はこの後にも心の揺れをもう一度見せるが、そうした姿は考えようによっては優柔不断で愚鈍にも嘲笑の対象となりかねない。なるほど、このような揺れ動く迷いは作品の傍流として瑣末な要素にしか思えないかもしれないが、しかし実は作品の底流にあって彼の迷いは眼に見えない大きな動因力となっている。つまり作品の主旋律を支えるほどの重要な契機となっている

のである。たとえば、真実らしきものの顕現する弾機として彼の迷いは機能している。さらに先走って言えば、動揺はやがて確信へと変容していくことになる。この動揺からの変容すべき確信がいかにして現実のものとなっていたか、そこに至るまでの道筋は妻の行動と連動しながら秘かに築かれていくが、それは作品の最後までつづく。

あの神秘から燃えあがる松明の灯りが  
 光と影のなかから私の姿を見分けたので、  
 ふたりの沈思する情熱は当惑の渦のなかで  
 ひとつのテーマを選んだのだろうか。彼女は  
 庭の小道を歩いたり部屋の数をかぞえるまえに  
 一冊の本を膝のうゑに拵げ  
 挿絵や文章について質問するのであった。  
 初めの頃には時折、  
 学術的な言葉の古びて乾ききった字体に眼を凝らし、  
 絢爛たる春をもはや満足させられず  
 古くなって干涸びてしまった粗朶<sup>そだ</sup>模様をじっと見凝めていた。  
 時には字体や模様の入ったページが  
 まるで愛しいひとの頬でもあるかのように撫でるのであった。

Or did the torchlight of that mystery  
 Pick out my features in such light and shade  
 Two contemplating passions chose one theme  
 Through sheer bewilderment.? She had not paced  
 The garden paths, nor counted up the rooms,  
 Before she had spread a book upon her knees  
 And asked about the pictures or the text;  
 And often those first days I saw her stare



On old dry writing in a learned tongue,  
 On old dry faggots that could never please  
 The extravagance of spring; or move a hand  
 As if that writing tor the figured page  
 Were some dear cheek.

(II, 115-127)

「あの難解な謎」を明かすべく、こうしていよいよ二人の新婚生活が始まるにあたって、彼らのその思いはひたすら「ひとつのテーマ」を巡って展開していく。「ふたりの沈思する情熱」が向かおうとする「ひとつのテーマ」とは何か。それはカリフとルカが対話の対象としたテーマと同じものであろうか。それとも「あの難解な謎」を指すのであろうか。「ひとつのテーマ」が何であるのかは、彼の動揺する迷いが確信へと辿り着いたときに初めて明らかになるだろう。

では「我々の生の向こう側に眼を凝らそうと精神を集中することができ」、しかも「全身が生命に充ち溢れており、／若さの泉そのものに見える」彼女がまずはその思いを向けるところは何処か。それは「一冊の本」、時代から取り残され人間から見向きもされなくなった学術書と思しき古書へと向けるのである。古びた「一冊の本」の内容に示した興味は、また内容だけでなく書物そのものにも及ぶ。記された活字や施されたデザインを眺めては、寄り添う恋人のようにそっと頬を寄せる。「一冊の本を膝のうえに拵げ／挿絵や文章について質問する」彼女、「字体や模様の入ったページが／まるで愛しいひとの頬でもあるかのように撫でる」彼女、こうした彼女の振舞いは、もとより彼女が「我々の生の向こう側に眼を凝らそうと精神を集中することができる」がゆえに、しかも「全身が生命に充ち溢れており、／若さの泉そのものに見える」がゆえに可能なのである。彼女の振舞いは精神なるものと愛なるものの兼備を象徴している。

このように書かれた内容にも書物そのものにも興味を示す姿は何を暗示する

のかと言え、対立物を前にして動揺しがちな彼とはちがって、対立物（形式と内容）を反撥し合うものとしてでなく、すでに一体となったものとして、しかも対立しているということ意識することなく受け容れている姿勢が暗に仄めかされていよう。それはルカに適しい理想的な女性を想定してカリフ自らが彼女の性格を輪郭づけたのであってみれば、納得がいくであろう。

次に彼女の行動が「月」の巡行の影響を受けるという状況のもとで、クスタ・ベン・ルカは「我々の生の向こう側」をまさに覗き込もうとする彼女の奇怪な振舞いに期せずして遭遇する。

月が顔を見せぬ夜

私は妻の寝姿が見える処に座って、  
 蠟燭の明りのもとで書きものをしていた。やがて寝返りを打ったので  
 明りで眠れないのではないかと思い、  
 布切れで明りを遮ろうとして立ち上がった。  
 すると、そのとき彼女の声が聞こえた。「こっちを向いてください、  
 あなたの膝を曲げ頬を蒼白にしてしまったものを私が解明しますから。」  
 見ると彼女はベッドに起きて座っていた。  
 話していたのは彼女だったのか、それとも大いなる霊だったのか。  
 たぶん霊が話していたのだろう。まる一時間  
 彼女は学者然として振舞い、私は子供のようだった。

Upon a moonless night

I sat where I could watch her sleeping form,  
 And wrote by candle-light; but her form moved,  
 And fearing that my light disturbed her sleep  
 I rose that I might screen it with a cloth.  
 I heard her voice, 'Turn that I may expound  
 What's bowed your shoulder and made pale your cheek';

And saw her sitting upright on the bed;  
 Or was it she that spoke or some great Djinn?  
 I say that a Djinn spoke. A live-long hour  
 She seemed the learned man and the child;  
 (11., 127-137)

月の巡行が彼女の行動に及ぼす影響は、たとえば「月が顔を見せぬ夜」にはどのような結果をもたらすのか。「月が顔を見せぬ夜」、それは『幻想録』によると、月の第一相に相当し根源的な色調を帯びた客観的世界の窮極を象徴しており、その窮極的な客観的世界とは、〈存在〉そのものを仄めかしている。したがってそこには人間の生の入る余地の全くない、凡そ現実の次元ではあり得ない絶対的な世界が、凡そ現実の色調を帯びていないこの世ならぬ圧倒的な世界が顕現している。

眠っていた彼女が起き上がり突如として振舞う思いも寄らぬ行為、すなわち彼の「膝を曲げ頬を蒼白にしてしまって」なおも彼に研究を強いている「あの難解な謎」を解き明かしてみせましょうと、彼女に取り憑いた「大いなる霊」がルカに伝える行為。この奇怪な振舞いはいわゆる〈霊媒〉を仲介役としてこれからあるメッセージを伝えることを予告している。実を言えば、こうした場面は飽くまでも作品のなかで展開している架空の出来事にすぎないのは疑う余地もないが、作品の外では、歴然とした事実でもあることを忘れてはならない。すでに述べたように 1917 年 10 月 14 日に結婚したジョージ・ハイド＝リーズは、その四日後に詩人の前で「自動筆記」を披露するわけだが、霊の言葉を彼女が無意識のうちに書き留めるという「自動筆記」のほかに、時には霊の声が彼女を介して囁かれたり、時には直接に霊の声がふたりに囁かれたりもした。その際、詩人は霊の語った文言をノートに記すのだが、その作業は数年間に亘ってつづけられ、書き溜めた分量は莫大なものとなった。やがてそれは 1925 年『幻想録』という大著として結実する。

さて「大いなる霊」に取り憑かれてまるで「学者然として」振舞った彼女は、

「あの難解な謎」を巡って果して何を解き明かしてくれたのだろうか。

父親を持たぬ真理が顕れたのであった、これまで読んだ  
 数多くの書物からも、彼女や私の精神が創りあげた  
 思想からも生まれては来なかった真理、  
 自ら生まれ、気高く生まれ出た孤高の真理、  
 さまよえる豊饒な夢のただなかを走り抜ける  
 目も覚めるような揺るぎなき直線、  
 私の骨が灰になるとき、アラビアの軍勢を  
 駆り立たせるにちがいない真理までもが顕れ出たのであった。

Truths without father came, truths that no book  
 Of all the uncounted books that I have read,  
 Nor thought out of her mind or mine begot,  
 Self-born, high-born, and solitary truths,  
 Those terrible implacable straight lines  
 Drawn through the wandering vegetative dream,  
 Even those truths that when my bones arc dust  
 Must drive the Arabian host.

(II., 138-145)

解き明かしたのは「謎」そのものの内実ではなく、むしろ「謎」の内実を顕わにするための一つのヒントともいうべきものである。「謎」を解明するにあたってそのヒントとなる指針は様々な相を帯びた「真理」として彼の前に顕現する。それらの「真理」はどれもこれまでの人知を遙かに超えて凡そ活字文化のなかでは培われることのなかった「真理」である。たぶん「数多くの書物」や「彼女や私の精神が創りあげた／思想」をもってしても紡ぎ出せなかった「真理」、  
 「父親を持たぬ」という凡そいかなる権威筋によっても構築されるこ

とのなかった「真理」、まさにそれは〈新しき「真理」〉の誕生を物語っている。流浪する人間の生が育んだ「さまよえる豊饒な夢」、その「夢」によって造られる幾筋もの錯綜した生の方位に決して迷い紛れることなく、ひと際鮮烈にひた走る一途な生の方位、換言すれば錯雑とした迷路のなかを貫き通した「直線」に象徴されるように、すべての生を超越した生それ自体に宿る「真理」、あるいは一切の関係を絶縁した地平に自生する「孤高の真理」、それらは相対的な現実には存在し得ない絶対的な「真理」を指している。

こうして「謎」を解き明かすべき指標としての「真理」が顕現したのち、彼女はしばらく平穏な日々を送るが、やがて月の相が変化するにつれて彼女の行動もまた変化していく。その変化は以前と同じように凡そ理解し難い彼女の奇怪な行動となって現れてくる。

声が静まり

彼女はベッドに身を横たえて眠りに就いた。そうして  
朝一番の光に目覚めて起きあがり  
部屋の掃除を始める。いったい何があったのかも、  
すっかり子供のように忘れて彼女は口ずさみながら家事に励むのであった。  
それから十二日間は自然に眠れたが、  
満月が最も高い位置にさしかかったとき、  
彼女は起きあがり、眼を閉じてぐっすり眠ったまま  
家のなかを走り抜けて行った。私は気づかれぬよう  
フードの付いた重いマントで彼女をくるんであげた。すると彼女は  
なかば走るようにして砂漠の最初の尾根に倒れ込み、  
その白い指であの図柄を砂のうえに描いた。  
それは日々の研究のなかで驚嘆している図柄であった。

The voice grew still,

And she lay down upon her bed and slept,

But woke at the first gleam of day, rose up  
And swept the house and sang about her work  
In childish ignorance of all that passed.  
A dozen nights of natural sleep, and then  
When the full moon swam to its greatest height  
She rose, and with her eyes shut fast in sleep  
Walked through the house. Unnoticed and unfelt  
I wrapped her in a hooded cloak, and she,  
Half running, dropped at the first ridge of the desert  
And there marked out those emblems on the sand  
That day by day I study and marvel at,  
With her white finger.

(ll., 145-158)

「月が顔を見せぬ夜」に起った慮外な出来事から数日が経ち、彼女はその驚くべき出来事のことも「すっかり子供のように忘れて」何気ない平穏な日々を送っている。しかし彼女の振舞いはなおも月の巡行に大きな影響を受けている。やがて月がその相全体を見せるとき、再び驚異なる事件ともいうべき事態が起る。「満月が最も高い位置にさしかかったとき」、人間の生のことごとく排除されたあの客観的世界の極致はすでに一掃され、それとは対極の世界が二人の間を占める。つまり「満月が最も高い位置」にあるという状況は、そこに人間の生が排除される点は同じだが、客観と厳しく対峙した主観的世界の極北を提示する。『幻想録』によると、その世界は月の第十五相に相当し人間の現実的な生を全く帯びていないものの、それにも拘らず、人間が理想を夢見て求める次元として定位されており、さらにこの絶対に辿り着けない理想の領野を、詩人は「存在の統一」と命名している。

平穏な日々から脱け出してさながら何かに取り憑かれて夢游するかのよう  
満月の夜のなかをさまよい出ていく彼女、そうして月明りに照らされて「砂漠」

をさまよう彼女は、なにやら不可思議な「あの図柄を砂に描いた」のである。それは、詩人が日頃から研鑽を積んでは驚嘆し圧倒されてきたまさに「あの図柄」であり、しかも「あの難解な謎」を読み解く象徴でもある。『幻想録』を射程に入れてみれば、「あの図柄」とは人間の生と歴史の暮れ方を象徴したとされる幾何学的な形象を指していると言えよう。「謎」を解く指標としての「真理」と同様に、「あの図柄」もまた「謎」を解明する手立てとして位置づけられるであろう。では、それを手立てに「謎」の解明は成し遂げられるのか。そして解明の結果、「存在の統一」に辿り着くことができるのか。「あの難解な謎」とは、しかしながら思うに、深い「真理」や「あの図柄」を経由したからといって解明できるわけでもなく、むしろクスタ・ベン・ルカにとってはより身近で切実な問題として「謎」の解明は展開していく可能性を秘めている。もっとも、「真理」と「あの図柄」が「謎」の解明に欠かすことのできない重要な認識の視座を提供しているということだけは忘れてはならぬ事実である。

## （7）

夢游するかのように「砂漠」にさまよい出た彼女は、こうして眠りから覚めることもなくクスタ・ベン・ルカに連れられて家に帰り再び日常生活に戻っていったが、それ以降は「大いなる霊」からも完全に解放されて文字通り平穏な日々を送ることになる。奇怪な出来事が一件落着いたとき、クスタ・ベン・ルカはカリフとの対話、新妻の常軌を逸した言動を内省しつつ総括し今後の身の処し方を明確にしようとする。がしかし、自身の来し方往く末を明確にしようとする彼の心の裡には再び深く動揺する自身が迷い出てくる。

私は彼女を眠らせたままそっと家に連れて帰った。

再び起きあがって彼女は部屋を掃除した、

まるで子供のように何があったのかも忘れて。

確か月に三度彼女の口から

砂漠を漂泊する霊の叡智が囁かれたが、  
あれから七年ほどたった今でも  
彼女は何があったのか知らないでいる。だが近頃は  
初めて私の本に示したあの異常な関心は失せている。  
私がそこにいるだけで満ち足りているようだ。それにしても  
私の熱情溢れた青春の不安すべてを  
最も辛抱強く聞いてくれた旧き学びの友よ、  
いまや私は平安を代償に知識を得なければならぬようだ。  
しかし、何も知らなかった彼女が事の顛末を知ってしまい、  
自分を愛してくれているのはあの声のためだけであって、  
贈り物も褒め言葉もすべて  
子供が欲しがるミルクと同じように、老人の渴望する  
深夜の声の代償にすぎないのだと思い込んでしまったら、どうすればいい  
だろう。  
もしも私の愛に対する信頼をなくして  
彼女が愛を失ったならば、いや  
初めの頃の、素朴さや愛、それに声までもすべて失ったならば、  
私の見事な羽はすっかり耄れ取られ  
私は打ち震えるばかりであろう。

I led her home asleep  
And once again she rose and swept the house  
In childish ignorance of all that passed.  
Even to-day, after some seven years  
When maybe thrice in every moon her mouth  
Murmured the wisdom of the desert Djinns,  
She keeps that ignorance, nor has she now  
That first unnatural interest in my books.



It seems enough that I am there; and yet,  
Old fellow-student, whose most patient ear  
Heard all the anxiety of my passionate youth,  
It seems I must buy knowledge with my peace.  
What if she lose her ignorance and so  
Dream that I love her only for the voice,  
That every gift and every word of praise  
Is but a payment for that midnight voice  
That is to age what milk is to a child?  
Were she to lose her love, because she had lost  
Her confidence in mine, or even lose  
Its first simplicity, love, voice and all,  
All my feathers would be plucked away  
And I left shivering.

(ll., 158-179)

たとえば「あの図柄」や「真理」を現実の世界にもたらした「霊の叡智」が彼女を介して披露されてから七年ほど経過したが、いまでは「私の本」にもその「異常な関心」を示すことなく彼女は日常の平穏な日々を送っている。かくして「我々の生の向こう側に眼を凝らそうと」する気力は彼女から消え失せ、ひとりの平凡な妻として二人の生活に充足感を覚えている。しかし、彼はその平穏な日々を乱すかのように、それとは逆の方向へ傾こうとする。つまり「私は平安を代償に知識を得なければならぬようだ」と得心して決意を堅くするのである。そのように充足した日常の「平安」を犠牲にしてまで「知識」を獲得しようとするのだが、その決意は日常性から逸脱した危険な振舞いが随伴するのを覚悟したうえでのことである。では、それほどまでに獲得しなければならない「知識」とは、一体どのようなものであるのか。「あの図柄」、「あの難解な謎」に関するそれなのであろうか。それとも彼女への愛情の真の所在を

捜し当てるといふ認識を物語っているのだろうか。

このように決意するとき、再び動揺する心の不安が彼を襲う。意を決した彼の胸裡には危険を孕む覚悟と同時にその決意を萎縮させてしまうような不安が募ってくるのはどうしてか。依然として彼の不安は二人の愛を巡っての不安であり、しかもそれは自身に対してではなく彼女の心変わりへの不安である。人知を超えた彼女の能力が「あの難解な謎」の解明に必ずや貢献してくれるだろうと期待した「私」の思いは、翻ってみるに、愛情に包まれるべきものとして他者を省みない利己的な野心にすぎず、もしも仮にその野心を自分に注いでくれた愛情だと勘違いしていたことに彼女が気づいたならば、二人の関係は終息を見ることになるのではないだろうか。そのように彼は不安に打ちひしがれるのである。結局のところ、こうした不安は最後まで消え去ることがなかった。このことは一体何を意味するのか。そこには愛と智の二律背反に引き裂かれて深く動揺する彼の姿が如実に示されている。しかしその一方では、不安と動揺が変容して確信に裏打ちされた覚悟を持つに至る瞬間がもうそこまで迫り来ていることを仄めかしてもいる。

あれかこれかと不安の裡に揺れ動きながらも、ようやく彼はカリフとの対話、新妻の言動を内省し総括しようとする。その内省された総括はクスタ・ベン・ルカの身の振り方を次のように方向づけるに至った。

……。あの声は

彼女の特異な愛情から叡智という意匠を引き出した。

あの象徴の記号も形象も、

パルメニデスの偉大な「論文」から由来すると

おまえが思ったあの抽象物すべても、

あのガイアーと立方体と深夜の事象もことごとく、

青春の苦くも甘い美しさに酔い痴れた

彼女の肉体を新たに表現したものにはほかならぬ。

かくして私の至高なる神秘はそのヴェールを脱いだ。

女の美しさは嵐に揺らめく旗である。  
 その旗の下には叡智が佇み、そして私だけが、  
 アラビアの恋する男のなかで私だけが、  
 その刺繍に眼も眩むことなく、  
 夜間に塗られた旗の複雑な襞にも迷うことなく  
 あの武装した者の話を聞くことができるのだ。

.... The voice has drawn  
 A quality of wisdom from her love's  
 Particular quality. The signs and shapes;  
 All those abstractions that you fancied were  
 From the great Treatise of Parmenides;  
 All, all those gyres and cubes and midnight things  
 Are but a new expression of her body  
 Drunk with the bitter sweetness of her youth.  
 And now my utmost mystery is out.  
 A woman's beauty is a storm-tossed banner;  
 Under it wisdom stands, and I alone —  
 Of all Arabia's lovers I alone —  
 Nor dazzled by the embroidery, nor lost  
 In the confusion of its night-dark folds,  
 Can hear the armed man speak.

(ll., 179-193)

「確か月に三度彼女の口から／砂漠を漂泊する霊の叡智が囁かれた」と語ったクスタ・ベン・ルカがやがて「旧き学びの友」に向かって「私は平安を代償に知識を得なければならぬようだ」と決意のほどを打ち明けたとき、愛の所在を巡る問題が浮上してきて不安と動揺に悩まされたが、しかし彼の決意は危険

の必ずや随伴するという覚悟を秘め持つのであった。そうした覚悟が不安と動揺を抑え込んで彼に微妙な変化を認識させるに至るのである。つまり「あの声は／彼女の特異な愛情から叡智という意匠を引き出した」のだと認識を新たにす。彼女の口から囁かれた「霊の叡智」は、もはや「霊」自らが創造したそれではなく、「霊」が彼女を媒介にして創り出した「叡智」であること、換言すれば、彼女こそが創造した「叡智」にほかならない。したがって、いまやそこには「霊の叡智」はなく、むしろ〈彼女の叡智〉が生まれていたということ、そしてその「叡智」は様々な「意匠」を象徴に掲げたこと、こうした微妙な変化を「知識」としてクスタ・ベン・ルカは獲得するに至る。「彼女の特異な愛情」とは、もちろん自動筆記という能力をもって「生の向こう側」を見凝つめる彼女の性向が培ったものであるが、しかしそこに極めて凡庸な愛情が加味されたとき初めて、その「愛情」は真に産み出されたと言える。

かくして彼の獲得する「知識」はさらに重要な事柄を伝える。彼女が砂漠に書き記した「あの図柄」とは、原文が複数形を示しているように、一つだけではない。彼女は「あの象徴の記号」や「あの形象」、「あの抽象物」、そして「あのガイアー」や「あの立方体」といったような様々な「あの図柄」をそこに描いていたのだろう。そうした様々な「あの図柄」は『幻想録』が人間の生と歴史の暮れ方を説明する際に用いているものだが、共通した点はどれも両極的もしくは対蹠的な構図に基づいて描かれていることである。では、どうして彼はここで唐突にも「叡智という意匠」としての様々な「あの図柄」を引き合いに出したのか。それは両極性の構図に対する彼の執拗なまでの意識ゆえであろう。こうした意識が極端にも彼に両極性の構図を原理化させようとするのである。その原理化は、両極性への意識がさらに自らを窮めようとするときに完成を見る。つまり砂漠に次から次へと描いた「あの図柄」は、すべて「彼女の肉体を新たに表現したものにほかならぬ」という大胆なまでに極端化された両極性の原理を彼は掲げるのである。換言すれば、象徴化され抽象化された「あの図柄」が「彼女の肉体」そのものを表象した〈エンブレム〉にほかならないという極めて個人的な両極性の原理が顕現した。

動揺と不安と覚悟が交錯するなかで獲得されるべきあの「知識」はついにこの極端化された両極性の原理といった地平を望見するに至った。こうした「知識」を道筋にして極端化された地平に立ち至ったとき、彼は「至高なる神秘」の「そのベール」を取り払うことができたのである。そして両極の狭間で揺れ動く、いやむしろ揺れ動きつづける地平に危険を覚悟のうえで彼は立ち尽くそうと決意する。

いま、クスタ・ベン・ルカのその確信に充ちた心の眼には「嵐に揺らめく旗」が浮かんで見える。心眼に映ったその「旗」の揺らめきはまさに「女の美しさ」を象徴していると彼は確信してやまない。そして「女の美しさ」の対極にあるべき「叡智」は同じ「揺らめく旗」の下に根づいている。ここにも両極の構図が見て取れる。

「旗」は揺らめかねばならない。揺らめいて初めて美しさが誕生する。ならば、女を美しくさせている根拠は「嵐」とされるが、そもそも「嵐」とは何か。そうしてクスタ・ベン・ルカが「旗」に施された「刺繍」や「複雑な襷」に翻弄されることもなく、「武装した者の話」を聞くことのできる唯一の人物であるということは、何を意味するのだろうか。

——つづく——

#### 〈注〉

引用はすべて *The Variorum Edition of the Poems of W. B. Yeats* (Peter Allt and Russell K. Alspach ed, Macmillan, London, 1989) による。